【新潟間税会長賞】

「税金泥棒はだあれ？」

新潟県立
新潟高等学校
二年　小林　柚葵

「税金泥棒」

これは、税金から給料が支払われている公務員や、税金による公的な支援を受けている人々を揶揄する言葉として使われる。こういった言葉を聞くたびに、私はそれが自分自身に向けられているような気がしてならない。

ある夏休みに東京に行った際、私は人生で初めてホームレスを見た。れんがの敷き詰められた広い歩道橋の端に段ボールで作られた簡素な家。東京の３５度近い暑さの中、骨が折れた日傘で照りつける日差しを防いでいる姿に、何がこの状況を作り出してしまったのだろう、そんなことを考えながら私はその男性の横を通り過ぎようとした。その時、「税金泥棒が。」通行人の中の一人がホームレスの男性の横を通り過ぎる際、そう呟いたのだった。その呟きがホームレスの男性の耳に届いていたのかはわからない。けれど、私にははっきりと、税金泥棒、そう聞こえた。すごく、すごく衝撃的だった。通行人の人は、ホームレスの男性が生活保護を受給していると思ってそんな言葉を口にしたのだろう。私は心の中で「税金泥棒」という言葉に反論しようとした。しかし、私は税に対する知識をあまり持っておらず、この状況に対して誰が正しくて誰が悪いのか、結論をつけることが出来ないまま、少しの反論の言葉も出てこなかった。私の心にはホームレスの男性に対する憐憫と、通行人に対する軽蔑がふつふつと湧きあがっていたが、冷静になるとこの出来事は、そんな単純な感情で割り切れるものではないということがわかってきた。私は生活保護を受給している人を税金泥棒だとは決して思わない。しかし、「税金泥棒が。」そう呟いた通行人の気持ちも、わかるのだ。自分が懸命に働いて納めたお金がよく知らないところで他人のために使われている、そう考えると。

その後も、私の頭の中にはずっと「税金泥棒」という言葉が残っていた。あの通行人の人の考えはひょっとすると正しいのではないか、それともあの時私が感じた軽蔑を信じて良いのだろうか、一体誰の意見が正しいのだろう。そんなことを考えていくうちに、今の自分とってこれだけは正しい、をう言い切れる一つの結論にたどり着いた。私にとっての「税金泥棒」は、他でもないこの私なのだと。税金を納めている身として、そして何より、税金の恩恵を受けている身として、税金の使い道もよくわからない、関心も持っていない、それこそ税金泥棒なのではないか。つまり、私も税金泥棒なのではないかと考えた。

私たちはどうしても、自分達は納税者だ、税金を納めている側なのだという一方的な視点から社会をみてしまいがちだと思う。しかしあくまでも私たちは、税金の上で、税金に支えられながら生きている納税者なのだ。そう考えると、少しは税金に対するイメージも変わるのではないだろうか。